

問答章（二）

一、 傲慢

甲「私は結婚してから十八年たちますが、お姑さんに、どうしても親切ができません。どうしたら親切ができましたか。」

乙「それはあなたの傲慢です。」

甲「それはまたどうしてでしょうか。」

乙「あなたとお姑さんとの間には、深い溝ができています。それはだれが造ったのでしょうか。考えてごらん下さい。あなたはお姑さんにご親切するどころか、あなたは十八年間、お姑さんを食ってきたのです。人を食ってきたのです。あなたのこれまで、自損損他とて、ただすべてを食ってきたのです。人を食ってきておいてご親切とは何事です。そんな尊い文字は如来にお返ししてしまいなさい。あなたにないものがあるように思っているがゆえに、傲慢です。腹の中の掃除が足りません。もつともつと如来のみ光によってあなた自身のほんとうの相を知るのです。ご親切どころか、お姑さんの前に手をつけてあやまるべきです。お姑さんを食つてき、これからも食つてゆくあなたです。懺悔すべきです。手をつくべきです。」

甲「間違っていました。確かに私が高かったです。………私は今長い間の肩の重荷を下していただきました。ありがとうございました。」

二、 第一歩の間違い

乙「お話を聞いて、不幸なあなたに同情致します。あなたのご両親すら、いかんともして下さるご縁の事ではないあなたのお身の上です。しかしそれゆえに、み法を求めて出はじめられたことは尊いことです。」

甲「しかしお話を聞かしていただいていると、私は、大きな間違いをしておりました。私はここへもやはり人間の苦の逃避のために、仏法を求めて来ていたのでした。」

乙「はじめはそれでも結構です。追いつ追いつ話がわかってくると、正しい歩み方がわかってくるべきです。」

甲「私の生活も考え方も間違っていました。どんなに苦しくとも背負ってゆきます。お念仏とともに。」

乙「だれもかれも、人生記録の第一行に『われはこの世において楽しかべきこと。幸福なるべきこと。』と書いています。この漠然たる欲の声が苦しめて居るので。念仏行に生きさせていただくための人生です。今から苦を逃避せず、自暴自棄にならず、念仏のうちに一切を受け取ってゆかれる時、あなたの一生は尊く輝くであります。念仏をぬきにしては、ついに精進も向上もあり得ません。」

甲「ありがとうございます。もう苦しい身の上だと悲観してはいません。一生念仏、求道精進いたします。」

三、 大行ぬきでは

甲「私はどうも、ありがたくもないし、生きることには喜びもありません。どうしたものでしょうか。」

乙「朝晩仏前に合掌念仏しますか。」

甲「怠りがちです。」

乙「あなたが商売する時、念仏とともに商売しますか。」

甲「いいえ、商売の時、念仏などありません。」

乙「夜になって暇ができた時、仏法について何か読みますか。」

甲「いいえ、ありません、いたしません。光明よりも、雑誌の方に手がゆきやすいのです。」

乙「信仰上の友人がありますか。」

甲「いいえ、ありません。ただちよつとした友人が二三人あるだけです。」

乙「だれかいつも、み法のことや生活について、指導してくれる人がありますか。」

甲「もちろんそれもあります。」

乙「それでは、生きることがありがたくもなく、喜ばしくも、尊くもないのが当然です。ありがたく、喜ばしく、尊重を觀ずるのには、そこに、嚴然たる法がなくはなりません。三毒五欲の出でくるままにしていて、なんら自己を培わないでいて、喜ばしくも明るくも、力強くもないのは当然であります。大行なく、大信のない生活、六字廢業の一日は、本願の生きたまわぬ一生は、人生の空費にすぎません。そこには、自己の正体もわからず、人生の実相も見えず、意義も知れず、罪惡生死の闇が横たわっているだけです。」

甲「何だか大鉄槌でやられたようです。問題にならぬ私でした。」